

熱帯の有用材 (23)

緒 方 健

イロンバ (Ilomba) 学名 : *Pycnanthus angolensis* (Welw.) Ward.
(Syn. : *P. kombo* (Baill.) Ward. ;
P. microcephalus (Benth.) Ward.)
(ニクズク科)

イロンバはギニアからアンゴラにいたる熱帯西アフリカ、さらに中央アフリカからウガンダ、タンザニアまでの広い範囲に分布する樹木で、熱帯降雨林から半落葉樹林にかけて生育する。やや二次林性の陽樹で、原生林には少なく、したがってその樹木が多い場所はその林が二次林的性質をもつことを示す。

イロンバはガボン地方の名称で、今日では木材の商業名として一般的に用いられる。このほか Diehn (リベリア), Walele (コートディヴォアール), Otie (ガーナ), Akomu (ナイジェリア), Bokondo (カメルーン), Eteng または NKombo (ガボン), Mutuje (アンゴラ), Bosenga (ザイール), Lunaba (ウガンダ) など多数の地方名が知られており、市場名として使われることもある。また Cardboard, Cardwood の英名で呼ばれることもある。

樹木の形状：樹高 35 m, 直径 80~120 cm になる常緑高木で、15~20 m の枝下高がある。樹幹は通直、円筒形で、板根はあまり発達しないが、老木では幹の基部に高さ 1.5 m 程度までの板根が認められることがある。樹皮は淡褐色〜灰褐色、浅く規則的に割れ、やや薄片状に剥げる。樹皮の切り口は淡赤色〜赤褐色でざらざらし、赤色の樹液がにじみ出る (はじめは淡色でも空気にふれるとすぐ赤色になる)。若い葉や花序は褐色の毛で覆われる。葉は単葉で互生し、葉身は長さ 13~30 cm, 幅 3~8 cm の狭楕円形、全縁で、20~35 の平行脈がある。葉裏は短い褐色の毛のため鉄錆色を示す。葉柄は長さ 1~2 cm。葉にほぼ常に虫による多数の小孔を有する。雌雄異株。雄花序は長さ 7.5~15 cm の不規則に枝分かれした円錐花序で、径約 5 mm の多数の頭状花序からなる。雄花は長さ約 2 mm の 1 個の雄ずいと、長さ約 1 cm の漏斗状で先端が 3 裂した萼からなり、萼の先には乳頭状突起がある。雌花序は長さ 30 cm になる円錐花序で、径約 1 mm の小花が数個ずつかたまつてつく。萼はつぼ形で、先端が浅く 3 裂する。雄花、雌花とも花卉を欠く。果実は長さ 2~4 cm, 径 2~2.5 cm の楕円形で、熟すると縦に 2 裂開し、中に赤色の仮種皮のある 1 個の種子を有する。種子にはナッツメグ (ニクズク : *Myristica fragrans* Houtt., モルッカ諸島原産) に似た芳香があるが、あまり強くない。立木の幹の切り口から血液に似た赤色の樹液が出るのはニクズク科樹木の一般的特徴で、木材にタンニン管というタンニンを含んだ樹液を出す組織があるためである。サバ (マレーシア) でニクズク科の樹木を一般に Dara-dara (dara はマレー語で血液の意) と呼ぶのはこのためである。

OGATA, Ken : Useful Timbers in the Tropics (23) Ilomba
農林水産省森林総合研究所

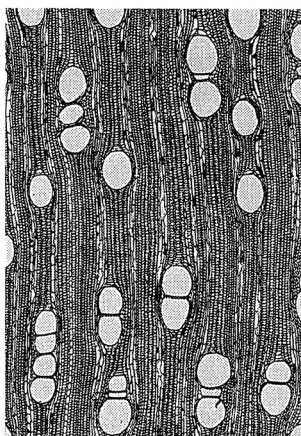


写真-1 *P. angolensis*
木口面 (16×)

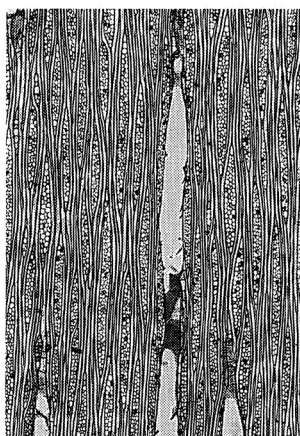


写真-2 同
板目面 (16×)

木材の特徴：全体が様な淡黄灰色～淡灰褐色～淡桃褐色を示し、ときに部分的にしみ状に黄色を帯びることがある。辺心材の区別は色調からは不明であるが、辺材はかなり幅が広く、搬出、乾燥が遅れるとこの部分は青変菌に犯されやすい。やや光沢を有する。肌目はやや粗で、縦断面では道管が褐色

の筋として明瞭である。木理は通直で、熱帯材に多い交錯木理がみられない。気乾比重は 0.49 (0.42～0.60) で、やや軽軟である。顕微鏡の特徴としては、道管は孤立するものと 2～4 個程度複合するものからなり、分布数は 2～4/mm²。孤立管孔の最大径は 230～290 μm。道管の穿孔は単穿孔。道管相互壁孔は交互壁孔で、直径 (8～) 10～12 μm、また道管放射組織間壁孔は大きさの不揃いな楕円形～水平に長い単壁孔。道管にはチロースが発達することがある。放射組織は両端に 1～2 (～3) 個の大型の細胞がある異性型で、最大列は個体により 3～4 列、最大高は約 1800～2500 μm。軸方向柔組織は周囲状～随伴散在状で、ニクヅ科によくみられる不規則な帯状柔組織は存在しない。繊維にはしばしば隔壁があるが、個体によっては認められないことがある。ニクヅ科の特徴として、木口では繊維が半径方向に整然と並ぶ。一部の放射組織にはタンニン管が存在するが、放射柔細胞とあまり大きさが変わらないため注意しないとわかりにくい場合がある。結晶やシリカは存在しない。

木材の加工性としては、乾燥に際し狂い、割れ、落込みが生じやすいので注意が必要である。しかし乾燥後の寸法安定性は高い。強度は大きくない。耐久性も高くなく、辺材はヒラタキクイの害を受けやすく、また菌にも弱い。心材への防腐剤の注入は比較的容易である。木理通直なため切削性はよく、良好な仕上がりが得られる。釘打ちも容易だが、割れる恐れがある。ロータリー切削、接着性にも問題がない。

イロンバは主にヨーロッパでオクメ (*Aucoumea klaineana* Pierre, カンラン科) の代わりに合板用材として用いられる。そのほか屋内造作材、家具の内部用材などや、また葉巻の箱用材としても用いられる。

タンザニア地方の Mtambara : *Cephalosphaera usambarensis* Ward. はやや比重が高いが (気乾比重約 0.6)、同様の材をもつことで知られる。